敦煌本『阿毗曇經』卷廿六の跋について

——則天武后時代僞濫佛教に關する一資料の紹介——

野上俊靜

一

大谷大學圖書館に、前々學長故大谷瑩誠先生の舊藏にかゝる敦煌本の『阿毗曇經』（卷廿六）といふ一卷の寫經がある。黃麻紙に書かれた美しいものであり、卷首を缺いてゐるのは惜しいが、卷末は完備してをり、特に次ぎのやうな甚だ興味深い跋が見えてゐることに注目される。

阿毗曇經卷廿六
大周長壽二年歲次癸巳五匣
四囚大福先寺寺主法明譯
白馬寺寺主懷義校

卽ちこの『阿毗曇經』（卷廿六）は、大周の長壽二年五月四日に、洛陽大福先寺の寺主たる法明が譯して、同じく白馬寺の寺主たる懷義が校定したといふのである。

大周とは云ふまでもなく則天武后の國號であり、その長壽二年は西曆六九三年に當たる。右の跋文の中に、則天の新字卽ち垂（年）・匣（月）・囚（日）などが用ひられてゐることによつても、この經典は長壽二年のこの時か或はその後あまり經過しないころ、恐らくは則天武后在世時代に書寫されたものであらうと、一應はすなほに考へられるのである。

二

ところで、この跋文の內容には、いさゝか疑ひを覺えざるを得ない。卽ち、『阿毗曇經』を法明が譯出して懷

義が校定したといふことは、はたして事實であるかといふ疑問があるわけである。といふのは、こゝに懷義とあるのは、かの有名な則天武后の革命に、その側近にあつて策動した妖僧薛懷義のことであり、法明また薛懷義に協力した人物に外ならないし、兩者とも經典譯出に關係するやうな人とは思はれないからである。

法明の專傳はないが、薛懷義の傳は『舊唐書』（卷一八三）に見えてゐるから、事蹟の概略はこれを知ることが出來る。

凡そ、則天武后の革命に、薛懷義一派が活躍して、武后の卽位を佛敎によつて理論づけ翼讚したことは、周知の事實であつて、旣に矢吹慶輝博士の名著『三階敎の研究』・塚本善隆博士の「國分寺と隋唐の佛敎政策並びに官寺」（『國分寺の研究』所收）などに、詳しく論ぜられてゐるところである。說明の便宜上、かうした懷義一派策動の跡を述ぶるならば、ほゞ次ぎの如くである。

薛懷義は一介の商人から身をおこし、たま〳〵武后の寵を得て僧となり、やがて洛陽の名刹白馬寺の寺主となつた。本姓は馮氏であつたが、武后の女太平公主の婿である薛紹の季父となつて、薛氏を名のるとゝもに、帝室に接近した。傳にも、

自是與洛陽大德僧法明・處一・惠儼・稜行・感知・靜軌・宣政等。在內道場念誦。

とあつて、頻りに唐室の內道場に出入したばかりでなく、旣に洛陽の僧法明卽ち、前記跋文中に見ゆる大福先寺々主法明とも、關係のあつたことがわかる。

垂拱四年（六八八）以後、薛懷義一派の策動橫暴はとくに甚しく、廟議は彼等によつて完全に牛耳られ、遂には武后の意をむかへて、彼等は『大雲經』に附會して讖文を製し、「武后は彌勒の下生であり、まさに唐に代つて帝位に卽くべし」と稱した。この時旣に國家の實權を掌握してをつた則天武后は、載初元年（六九〇）九月、唐の國號を廢して周をたて、自ら帝を稱して、名實ともに天下に君臨したのであり、同年十月には、全國諸州に夫々大雲經寺一所が設けられて、そこでは僧徒によつて、武后の卽位が經說にかなひ、天下に太平をもたらすものであると宣傳されたのである。そして、讖文作製に功あつた懷義・法明等は、縣公に封ぜられ、また莫大な賜與にあづかつた。かうしたことは、すべて『舊唐書』の則天紀及び薛懷義の傳に見ゆる。ともかくも、薛懷義等はこのころ一般社會に浸透してをつた彌勒の信仰を巧みに利用して、武后革命の理論づけに一時成功したわけである。

武后卽位後の數年間が薛懷義の最も得意な時代であつ

た。これまで認められなかつた佛教側の要求も、彼の主張によつて、容易に解決される。宮中に於ける道士・僧侶の席次が、所謂「道先佛後」から「佛先道後」に變更されたのもこの期間の出來事である。[2] 從つて朝廷との關係に於いて、佛教の立場が道教よりも有利なものに展開したことは、懷義等の活躍によることではあるが、佛說に附會して、俗權におもねつた彼等一派の佛教が、僞濫虛與にみちたものであつたことは、云ふまでもない。

武后卽位後の數年間、卽ち薛懷義全盛時代に於けるその專横のかず〳〵は、史書に明快に記されてをる。さすがの則天武后も、その目にあまる態度に激怒したのか、ひそかに人をして薛懷義を殺さしめたのであつた。それは恐らくは證聖元年（六九五）のことであつたと推定される。塚本博士も云はれてゐる如く、妖僧薛懷義が革命の首謀者であつたか、はたまた複雜な性格をもつ則天武后の一派に利用されたものであつたかは、俄かに決定しがたいことではあらう[3]が、いづれにしても、薛懷義が當時の僞濫佛教の立役者であつたことには、間違ひはない。

三

佛教々學や言語文字の學に精通してゐたとは思はれない僞濫佛教の立役者薛懷義が、譯出された經典の校定にあたつたといふことは、いさゝかおかしくなつてくるのである。さらには、さうした懷義の相棒となつた法明が、胡本から佛典を譯出したといふことにも、疑問をもたざるを得ないのである。もつとも、兩者を比較するならば、法明の方が多少とも佛教學に對する理解はあつたと思はれる。專傳がないから、彼の人となりは明かではないが、さきに引いた『舊唐書』の文にも、とにかく洛陽大德法明とあるし、また『大雲經』卽ち北涼の曇無讖譯の『大方等無想大雲經』を革命に利用したのは、恐らくは法明の入れ智慧であつたのであらうから、一介の商人から突然躍り出した懷義よりも、彼の方が經典に對する心得はあつたと思はれる。たゞし、それも比較したうへのことであつて、彼が深い學識をもつてゐたといふのではないし、したがつて特殊な才能を必要とする經典の飜譯が彼によつてなされたものとは考へられない。則天武后時代以後の佛典目錄の諸書にも、譯經家としての彼の名前は、絶えて見受けられないのである。してみると、この敦煌本『阿毗曇經』の本文は、誰かほかの人の譯ではなからうかといふことになる。

さて、このことについて、私は幸ひにも學友稻葉正就

仁兄より、適確なる御教示を得た。以下述ぶるところは、全く兄の御協力によつて知り得た事實である。

この敦煌本『阿毗曇經』卷廿六は、法明の譯ではなく、實は諸藏經の中に現存するもので、前秦の建元十九年の（三八三）に僧伽提婆と竺佛念が協力して譯出した『阿毗曇八犍度論』卷廿六に外ならないのである。卽ち、同書の「過去得跋渠第一の二終りから緣跋渠第二の全部」であつて、正藏（一五四三）廿六卷八九一頁Cより八九三頁　までに相當する。しかも文字・語句にも殆んど出入がないところから、異譯本ではないかといふ疑念も全くないわけであつて、要するに、敦煌本の跋は僧伽提婆等の譯を故意に僞つて、法明譯懷義校としたものに外ならないといふ結論に到達する。ちなみに、『阿毗曇八犍度論』三十卷は云ふまでもなく舊譯であつて、出來がよくないところから、玄奘の譯もあらはれてゐる。玄奘譯は『阿毗達磨發知論』といひ、その敦煌本に相當するところは、「正藏（一五四四）廿六卷一〇一一頁Aより一〇一三Cまで」である。

四

ところで問題はなほ殘る。それは、この敦煌本『阿毗曇經』の跋文の內容が、右に述べた如く虛僞であるとすれば、かゝる虛僞の跋は一體いつ出來たかといふことである。

そこで再び原本をよく注意して見ると、この經典の本文と跋とは、同一人の筆ではないやうに考へられる。つまり、經の本文はさきに書かれてをつて、後から跋が書き加へられたといふことになるのである。そして、本文は隋唐初のものと見てまづ間違ひなからうが、なほ跋が書き加へられたのはいつかといふ問題がある。このことについては、既に指摘した如く跋文中に則天の新字が見ゆるところからして、新字の用ひられた時代卽ち武后在世時代時に、薛懷義一派のものによつて、書かれたか書かしめられたものであらうとの推測が成立する。則天の新字は、特別の場合を除いては、武后沒後には殆んど使用されてゐないと見られるから、この推論も可能である。況んや、跋文中の文字にして前記の三字以外には、用ふべき新字がないといふに於いては、なほさらである。換言すれば、用ふべき則天の新字がありながら、それを用ひてゐないところがあるとすれば、この跋は則天時代のものとしては、いさゝか怪しいといふことになるのである。今はさうしたことはないから、一應當時或は

その直後のものであると考へられる次第である。

たゞし、ことは中國の場合であるから、跋はずつと後世になつて書き加へられたものではないかといふことも、考へてみなくてはならない。それにはまた二つの場合が想像される。一は、敦煌の石室に納められる以前、即ち宋代初め頃までに、この經の古いものであることを示さんがために、書き加へられたとすること、二は、甚だ極端なことではあるが、廿世紀になつて敦煌から運び出されて轉々としてゐる間に、書き加へられたとすることである。まづ後者のやうなことはなからうと思はれるが、ともかく可なり後世になつて書き加へられたのではないかと云ふ疑問は殘らぬでもない。たゞその場合に於いても、かゝる跋を全く創作するといふことはないのであつて、何かその原形になるものがあつたに相違ないのである。ことに薛懷義や法明の人となりを知つてゐて、意識的にかゝる跋を創作したとは考へられないのである。從つて、とにかく敦煌本『阿毗曇經』卷廿六にかゝる跋の見ゆることは、則天武后時代の僞濫佛教の新たな一面を證明するものであることに間違ひはない。

五

以上、則天武后時代宮廷を背景にして猖獗してゐた僞濫佛教の一面を新資料によつて紹介したのであるが、私は決して當時の佛教が、かゝる不健康なものばかりであつたと主張するものではない。云ふまでもなく、當時は唐初より培養された國力が充實した時期に當り、宮廷に於いては武后の革命といふ波瀾があつたにも拘らず、國威はなほ四隣にのびてをり、國内の政治もまたそれほど動搖はしてゐないのである。佛教もまた一面健全な樣相を示して發達してゐる。譯經家として名高い菩提流志が來たのは、長壽二年のことであり、八十華嚴の譯出者として知られてゐる實叉難陀の來支、西方求法で名ある義淨の歸朝も、その後二年のことである。華嚴の賢首大師法藏や、禪の六祖慧能が大いに活躍してゐたのも、またこの頃のことに他ならない。僞濫佛教はみだれてゐた武后の宮廷に一時さかえたにすぎないもので、一般には佛教はなほ健全な情態に於いて展開してゐたのである。

註① 經の本文と跋の關係は、のちに詳論する。

② 『舊唐書』卷六則天皇后紀に

「天授二年四月。令釋教在道法之上。僧尼處道士女冠之前。」と見ゆる。

③ 前記「國分寺と隋唐の佛教政策並びに官寺」參照。